

山形国際ドキュメンタリー映画祭2025
招待作品

座・高円寺ドキュメンタリーフェスティバル2026
正式出品作品

ドキュメンタリー映画

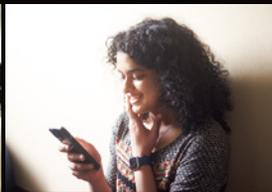
ロッコク・キッチン

みんな、なに食べて どう生きてるんだろ？

原発事故から13年、

福島の国道6号線を旅して見つめた

温かくておいしい日常



監督：川内有緒 + 三好大輔 音楽：坂口恭平

出演：スワスティカ・ハルシュ・ジャジュ 中筋 純 武内 優 ほか

プロデューサー：渡辺陽一 宮本実実 アニメーション：森下豊子 森下征治 サウンドデザイン：滝野ますみ スチール：一之瀬ちひろ 宣伝美術：新谷佐知子 高野美緒子 山田真沙美
協力：板橋基之 高橋洋亮 名瀬隆一郎 根本李安奈 福田一治 NPO法人20世紀アーカイブ仙台 一般社団法人双葉郡地域観光研究協会 読書風息つぎ おれたちの伝承館
大熊町立学び舎ゆめの森 ペンギン 双葉町役場 テレビユー福島 東日本大震災・原子力災害伝承館 ほか 助成：ハマカルアートプロジェクト2023/2024 ハマコネ 宣伝：平井万里子
2025年/日本/カラー/122分/16:9/DCP/ドキュメンタリー 制作：ALPS PICTURES INC. 配給・製作：株式会社植田印刷所 ©2025 Rokkoku Kitchen Project



rokkokukitchen.com



125325-A

決して

何かを強く主張するわけではない。怒りや悲しみを訴えかけるわけでもない。むしろ淡々と登場人物の声を拾い上げ、綴っていく。そこにあるのは、災禍の非日常ではなく、日々粛々と繰り返されている私たちが「ロッコクの民」の日常である。

小松理虔（地域活動家）

浜通り

で生きることを選んだ、出身地や職業、国籍が違ふ人たちの「今」を知ろうと川内監督が不躰に発する「昨日の夜、何食べました？」という遠慮も媚びもない率直な声。全くもって痺れるセリフである。

ヤンヨンビ（映画監督）

帰還

できた人も、できなかった人も、移住をした人も、あなたがいま感じていることや、ここでつくりあげた日常はとも素敵です」と肯定してくれているようである意味「敵し」や「敵い」を感じさせる映画ではないかと思えます。

高橋洋充（浪江町出身／ホームムービー提供者）

東京電力福島第一原子力発電所



どんなキッチンで何を作り、何を食べているのか。ひとりなのか。誰かと一緒なのか。何を楽しんで、何がイヤで。何を考え、何を忘れ、何を覚えているのか。

東日本大震災と原発事故から13年が経った2024年、監督の川内有緒と三好大輔は、東京と福島を結ぶ国道6号線（通称「ロッコク」）を何度も往復していた。

ロッコク沿いの一部の町は長く帰還困難区域となり、一度はすべての光を失った。今ここでは、帰還した住民、移住者、仕事や復興のためにやって来た人々が入り混じり、モザイク模様の暮らしが形作られている。

本作は、そんな異なる背景の人々の日常と人生を、軽やかに、かつ深く見つめるロードムービーである。キッチンに立つ姿、料理の香り、思い出される記憶、笑いあう人々の顔、語られる言葉、こぼれる涙――。

映像に刻まれた福島の新しい生活史。



2008年の双葉町郡山海岸を映したホームムービー



「第35回 Bunkamura ドウマゴ文学賞」受賞！
書籍『ロッコク・キッチン』
川内有緒 著 講談社
2,090円（税込）304ページ
川内有緒が映画と同時に書き下ろしたノンフィクションエッセイ。
（写真：一之瀬ひろ）

全国！
順次公開。



2026年2月14日(土)より
ポレポレ東中野
03 3371 0088 pole2.co.jp

2026年3月6日(金)より
K2 シモキタ
エキマエ シネマ
k2-cinema.com